

9月16日、高校生の就職試験が始まる。昨年、東北6県で求人数の低迷が問題になり、各県が緊急対策を行ったことはまだ記憶に新しい。

私は進路情報の会社「さんぽつ」(東京)の専任講師として、東北の高校生に進路や就職に関する情報を提供している。それも有り、彼らの動向が自分のこのように気掛かりだ。

就職難が騒がれている一方で、せっかく社会に出てみずぐに離職してしまう高校生は少なくない。厚生労働省の「新規高卒者離職率データ」によると、宮城県の一年度の離職率は、1997年卒から



2008年卒までずっと全国平均を上回っている。

例えば08年卒の場合、全国平均が19.4%で宮城県は21.2%である。わずかな差だが、12年もの間、全国平均を上回り続けてきた原因の分析は早急にしなければならぬと思う。

離職率を減らすため、最近重視されているのが、社会に出る前に企業などで働くインターンシップだ。どの企業も内定は出したものの、「この学生は本採用に値するだろうか」とあらためて考えるのが本音である、というのが関係者の話である。

インターンシップはつまり、企業が「人材」の中から、大事な財産になり得る「人材」を探し出す期間といえる。生徒にもメリットはあり、過去5年間でインターンシップに参加する日本の学生数は2倍に増加している。

6~7月、「さんぽつ」のガイダンスで、秋田県内4校の高校2年生に「インターンシップ マナー指導」について話を聞いてもらう機会に恵まれた。彼らは夏休みなどを利用してインターンシップを行うという。期間は3日間だ

高校生の就職

入社後の努力こそ大切

が、毎日8時間、計24時間もの社会参加のチャンスがある。一人一人が目標を掲げ、マナーに気を付けて、不安とわくわく感を抱いて臨むのだろう。そこから自分の目や耳で気付き、得たものは、翌年のそれぞれの進路に必ず役立つと信じていたい。

企業が新卒に魅力を感じるのには、今後の成長に期待できるからだろう。そして、第二新卒や中途採用に求めるのとは異なる即戦力(自分の頭で考え、行動できる自律性)が求められる。

内定は決してゴールではない。それをもつまでに生徒自身が努力して得た一つ一つを、働きたした後、仕事やさまざ

三幸学園仙台リゾート&
スポーツ専門学校教員

橋本 利子

(角田市)

まな人間関係のコミュニケーションにどう生かしていけるかが大事だ、とあらためて伝えたい。

そして、生徒の前に立つ私たちも忘れてはいけないことがある。生徒は目の前にいる私たちを通し、「働く社会人」を実感しているという自覚だ。「さんぽつ」のガイダンスなどでは、どんなに立派な講話をしても、働く者としての情熱を伝えられなければ、生徒の反応は鈍ってしまう。

日本の雇用の「三種の神器」のうち、「年功序列」と「終身雇用」は既に崩壊した。「新卒一括定期採用」も変化し始めている。新しい雇用体制では、企業に所属していることに満足するだけでなく、「どうすれば成果を出せるか」と、課せられた使命を真摯(しんしん)に受け止めて努力する必要がある。それが本当の「就職」だと生徒に伝えていきたい。

私も一人の「就職者」として現状に感謝し、マンネリに陥らない努力を続けていこうと思う。生徒に「満足」してもらうためにいろいろ「練り」ながら工夫を凝らし、「満練」とプラス思考でとらえ、進化し続ける教員や講師でありたい。